

No. 1043

サケ漁

—岩手—

漁村の朝は静かに明ける。一九七四年の夜明けだ。岩手県宮古市の津軽石川では、サケ漁が今たけなわ。朝七時、夜明けを待ちかねたように澄みきった川へ船を出す。仕掛けた網の中で大きな水しぶきがあがる。この川から放流されて四年、北洋の荒波で大きく成長したサケの群れが産卵に帰ってきたのだ。漁師のかけ声があたりの静寂をつきやぶる。獲る漁業から育てる漁業へ、六年前からはじめた「えつけ放流」がやっと成果をもたらしはじめた。今年は昨年のお二倍もの豊漁だ。一日約千匹、漁を終える二月十日頃までに二億円近い収益をあげるといふ。

獲ったサケはすぐ腹をさいて卵を出し、人工授精でふ化される。おとずれる春、四、五センチに育った稚魚がこの川に放たれ、そしてまた四年——公害から河川を守り、自然の美しさが保たれるかぎり、津軽石川にサケの大漁が続くだろう。

おっしょんと子供たち

—日本の福祉—

すべての児童の幸福をはかるために定められた児童憲章には児童は人として尊ばれ、社会の一員として重んぜられ、よい環境の中で育てられる旨記されている。

長野県千曲川沿いの長野市篠ノ井に、円福寺という小さな寺がある。この寺の朝はかわいい子供たちの読経で明ける。和尚の藤本幸邦さん(63歳)は戦後28年間、親のない子や恵まれない子供たちを集めて世話をしてきた。都市化社会の中で、離婚、交通事故、蒸発等で子供を育てられない親が増えてきた。今39人の子供たちがおっしょんと共に暮らしている。川原で子供といっしょにスキーを楽しむおっしょんは元気な子供の姿に目を細める。お腹をすかした子供たちの食欲は旺盛だ。39人のお母さん、和尚の妻、さとえさんは食事の準備で忙しい毎日だ。保母、栄養士の資格もとり、安くて栄養価の高い料理は子供たちを満足させている。

雪の降る寒い日、また一人の少女が入ってきた。お母さんの交通事故死で、生活できなくなったからだ。この子もまたおっしょんのもとで、大きく成長してゆくことだろう。こうした和尚さんの努力は近頃になってやっとまわりの人々に理解されはじめた。食べ物や衣類の差入れに来てくれる人もいる。この子供たちが、あわれみの対象であってはならない。ハンディを負っているのだから逆にできる限りの待遇をしてやるべきだ。国家は児童の父、社会は児童の母であれ。これがおっしょんの主張である。